

## バランスが崩れた現代教育の問題 — 仏教思想に基づいて教育を考える —

チュイ・デン・ブン

桐蔭横浜大学大学院法学研究科法律学専攻

(2010 年 9 月 15 日 受理)

### はじめに

一般説では、「今の社会は教育水準が過去より大きく高められ、進歩している」と認識されています。しかし、それとは裏腹に現代ほど精神的荒廃が悲劇を起こした時代はないでしょう。戦争・犯罪・自殺・孤独死・過労死・環境汚染などの問題は、それを裏付ける決定的な証拠となり得ます。

従来、教育は、そうした諸問題を減らし、無くして個人レベルからグローバルなレベルに至るまでのすべての人々を自然環境との調和の中で共創双勝・共存共栄の道へと導く役割を果たすべきなのです。

しかし、近代以降、政治が唯物論の片面的な見解を無条件で支え過ぎたため、教育が腐敗し、多くの人々が唯物論の見解を基準に世界を見るようになりました。

唯物論者は、人間をも「人的資源」ないし「物」として取り扱い、外的な経済的・政治的諸条件の改革で人間のすべてを解決し得ると考えています。しかし、周知のように法律や規則な

どをいくら制定しても戦争・犯罪・汚職問題などが止まらないし、先進諸国においても人々の精神的貧困問題が深刻化しています。

本論では、そうした問題を念頭により良い社会を築くために、どのような教育制度が求められ、必要性に迫られているのかを検討してみたいと思います。

### 教育とは何か

教育の問題を語る際、まず、「教育」とは何かを知る必要があります。『大辞林』を引くと、教育とは、「他人に対して意図的な働きかけを行うことによって、その人間を望ましい方向へ変化させること」と定義されていますが、教育を文字通りに解釈すると、「教えて育てる」という意味となります。そこで、「何を教えて何を育てるか」は重要な課題となります。これについて、仏教思想と結び付けて論じるのは新しい重要な意義を持つと思います。

仏教思想に基づく、教育の目的は、人々に究極的な幸福及び平和への道を教え、個々

人が自ら苦しみから離脱できる力を持つようにさせることです。具体的には、聖俗両界に共通し得る課題として、いわゆる「四諦<sup>i</sup>・八正道<sup>ii</sup>」などの教育理念に基づいて人々の「三門<sup>iii</sup>」行為を健康へと導いていくことです。学校教育の場合は、生徒に対して「賢者の三業<sup>iv</sup>」を同時に発展させることも強く求められます。実際、それぞれ本来の教育の在り方であり、良い人間社会を築くための基盤ではないかと思われまます。

## なぜ教育が重要か

では、なぜ、そうした教育の在り方が重要となるのでしょうか。

教育の目的は、人が人間性を養い、人格を高めることだと言ってよいと思われまます。それには異論の余地がないでしょう。例えば、一世代を慈悲心・愛（非暴力主義）と智慧（縁起＝相互依存論）に基づいて教育をすれば、その国の国民は良い政府を持つことになり、隣人諸国も安心していられます。それとは逆に、一世代を唯物論の一面的な見解や自己中心の愛国主義に基づいて教育をすれば、その国の国民は、心が狭くなり、自分の外に違う世界が広がっていることを理解できなくなります。

それは、個人レベルにおいても同じです。例えば、AとBがいて、Aは否定的な感情を持つ人で、Bは肯定的な感情を持つ人である場合に第三者によるAとBの見方を分析すると、第三者の眼には、Aの方が傲慢で自己中心的で近寄りにくい存在として、Aとの関係を避けた方が良いと考えるのに対して、Bの方が親切で人間性に溢れた人格者であるとして仲の良い友達になろうという、それぞれ異なる対応がとられます。

なぜかと言うと、Aの方が否定的な感情を持つがゆえに、Aの眼には相手のほとんどが悪く映ってくるのに対して、Bの方は肯定的な感情を有するがゆえに、Bの眼には他人のすべてが美しく見えるからです。

その意味で、より良い人間を育てるためにも、より良い社会を築くためにも良い教育制度が必要不可欠だということが分かります。問題は、その良い教育制度の基礎に何を置くべきかということになります。

チベットの例、七世紀に仏教が導入されて以来、国家主導で仏教の発展を支えてきたため、仏教の核心ともいえるべき慈悲心・愛と縁起の教えが一般市民の生活に浸透しました。例えば、家庭教育の中で「たとえ小さな昆虫であっても殺してはいけませんよ」と良く教えられますが、それは単なる殺生をしてはいけないということではなく、その根拠を縁起論の因果関係（善因善果・悪因悪報）の視点から説明されます。

特に僧院の場合は、上述した賢者の三業は、慈悲と縁起をより正しく知るために設けられた教育制度の柱として進められてきました。そうした教育制度は、結局、ツォンカパ大師やジェワ・パンチェン大師（ダライ・ラマ法王とパンチェン・ラマ法王：ジェワとは勝者の意味で、ダライ・ラマ法王を指します。）のような多くの偉大な人物を生み出す原動力となっただけではなく、一般チベット人の非暴力主義及び諸現象の相互依存性に対する正しい認識を生み出すための重要な機能を果たしました。

従って、チベット高原に暮らしている人々は、最近まで歴史的に自然環境と調和の中で共創双勝・共存共栄の社会理念を現実の生活の中で共有し、守り続けることができたといえます。

## 現代教育の問題

しかし、現代の教育制度の中にはそうした重要な内容が導入されていません。では、どこが問題となっているのでしょうか。

世界的な共通問題として指摘し得るのは、現代の教育制度は単なる大量の知識を伝達して生徒の「知性」を高めるという「知識教育」のみを重要視していることです。

物質的にも精神的にも豊かで平和な人間社会を築くには、「知識教育」及び慈悲心と智慧に基づく「理性教育」の両立が必要となります。

なぜかと言うと、慈悲心・愛及び縁起は、すべての人類に共通し得る科学的な人間観・世界観で、そうした教育がない社会では、人々の思想の正当な理解や健全な発展が生まれなからです。

では、その結果として具体的にはどのような問題が生じているのでしょうか。

### 1. 家庭教育の問題

家庭は、子供の心に慈悲・愛及び縁起を知るための智慧の種を植え、元気な芽が出てくるようにしておく場所です。

親子関係及び兄弟姉妹関係の望ましい方向もそうした無条件の慈悲心・愛及び縁起を知る智慧に基づく教育によって初めて成立します。

もし両親が子供の素朴で健康な精神状態をそのまま良い方向へと育てていけなかったり、子供の心の育て方に無関心であったり、否定的な感情で子育てをしたりした場合、その子供の本能的で潜在的に備えている慈悲心・愛と縁起を知る智慧の種が元気に成長することが難しくなります。

今から20年前頃は、私の出身地でも依然として「小さな昆虫さえ殺してはいけない」「他人を虐めないでね」「年上の方を尊敬し、年下の者に優しくしなさい」等々の伝統的な教育が盛んに行われていました。

しかし、現在、我がチベットにおいてもカネがないと生きていけなくなり、生きていくためにカネを求めて、東奔西走せざるを得なくなったため、今の日本や中国などのように親子及び兄弟姉妹の関係も薄くなり、お互いの存在に全く無関心な人も増えつつあります。親子関係の間に虐待問題も起きています。実に異常事態です。

### 2. 学校教育の問題

学校は、家庭で育ててきた慈悲心・愛と縁起を知る智慧の種の芽をより良い品質の水分

や肥料でバランス良く育てて、実りのあるものへと成熟させる場所です。

私が、中学生及び高校生の時代、別のクラスである還俗した高僧の先生が中学校一年生から高校を卒業するまでの担当教師を勤めていました。そこで注目したいのは、なぜ、全校でそのクラスが六年間に渡って生徒の成績の面においても、日常の振る舞いの面においても「文明クラス」として奨励されたのかということです。また、なぜ、クラス全員が大学受験に合格したのか、という問題です。

当該学校の一つのクラスは平均50人程度で、毎年一つのクラスで10人以上が大学受験に合格した事例は存在していなかったし、私のクラスでも大学受験に合格したのは43人の中でただ6人でした。

なぜそれほど大きな格差が出たのでしょうか。その原因は、主に高僧教師の学問の深さや親切さにあり、その学問の深さや親切さは生徒全員の心の中にきちんと届いたと思われるからです。私は、その高僧教師の授業を受ける機会に恵まれませんでした。校内や町を歩く時、蟻など小さな昆虫をも足で踏まないように常に注意しながら歩く様子は、今も記憶に新しいです。

生徒の学問に対する「説・弁・著」三業のレベルの高さは教師に依存しており、教師の学問の深さや「身・言・意」の行為の正しさは、生徒の日常行動から読み取れます。

仏教思想に基づく、教師と生徒の定義について次の諸条件が求められています。

(1) 教師とは何かと問われると、少なくとも次の諸条件を備えなければなりません。

#### ① 穏やか

教師は、生徒が模範的な存在として見習うべき相手ですので、教師の行動及び言動が常に清潔で穏やかでなければなりません。

#### ② 平和

教師は、憎悪・傲慢・嫉妬・偏見・狡猾など否定的感情とは無縁でいなければなりません。仮に教師がそうした否定的感情に支配されていると、生徒の知性及び理性を正しい方

向へと導くことができません。

③ 知識

教師は、生徒より豊かな知識を持って、善悪分別・取捨選択を上手に指導できる存在でなければなりません。仮に生徒と教師の知識レベルが対等であった場合、生徒の知性的な成長に何も期待できません。

④ 勤勉

教師は、生徒が授業の内容を完全に正しく理解してくれるまで様々な工夫をして理解されるようにしなければなりません。

⑤ 解説力

教師は、生徒の性格に合わせて様々な方法を通じて授業の内容が分かりやすく理解できるように教え方をしなければなりません。

⑥ 親切

教師は、生徒を自分の子供と同じ存在として考え、生徒の三門の健康な成長に勤めればなりません。

等々の条件を備えている者は、教師の本来の姿として強調されています。

(2) 同様、生徒とは何かと問われる時も少なくとも次の諸条件が強調されます。

① 尊敬心

生徒は、その三門の肯定的立場で常に教師を尊敬しなければなりません。

② 自立性

生徒は、偏見に左右されてはいけません。偏見に左右されて自立性が失われてしまうと、教師に対する感情が複雑化し、時には否定的な言動で教師同士の間、或いは教師と生徒の間の正常関係を破壊してしまうこともあります。

③ 意欲

生徒は、勉強に意欲を持つ存在でなければなりません。勉強に意欲を持たないと、本を一生懸命に読んでも、その内容を正しく知ることができません。

④ 判断力

生徒は、上手に善悪分別・取捨選択する智慧を発揮できる存在でなければなりません。

⑤ 忍耐力

生徒は、授業の内容がいくら難しくても、それに悩まず、恐れず取り込む精神を持つ存在でなければなりません。

等々の条件を備えている者は、生徒の本来の姿として強調されていますが、また生徒は容器のたとえとして受講するプロセスの中で生じ得る次の三欠点も捨てなければなりません。

① 下向き状態の容器

容器は下向き状態にすると、中にモノが入りません。それと同じように、生徒は授業及び授業の内容を聞かず、考えず、修せずの態度をとると、いくら教えても意味がありません。その欠点を無くさなければなりません。

② 割れた状態の容器

容器は下向きではないとしても、もし割れた状態の欠点が存在した場合、モノを入れても漏れてしまいます。それと同じように、授業を聞いても、その内容を考えず、修せずの態度で怠けるとすぐ忘れてしまいます。その欠点を捨てなければなりません。

③ 汚れた状態の容器

容器は下向きでも、割れた状態でもないとしても、もし容器の中が汚れている状態であった場合、中にきれいなモノを入れても汚れてしまいます。それと同じように、生徒は受講する時、自分の三門が傲慢・憎悪・怠けなど否定感情や態度に汚染されてしまうと、教師がいくら貴重なことを教えても、それは無意味として無視してしまうこととなります。

そのように仏教の經典の中に教師及び生徒の定義、教師と生徒の関係、教え方などについて具体的・体系的に述べられていますが、私も中学校及び高校の時代からその部分的なものを教わってきました。

しかし、1990年代に入ると、そうした教育制度は中国の民族政策の影響で維持しにくくなりつつあります。日本の方はどうでしょうか。

3. 社会教育の問題

社会は、家庭及び学校で成熟させられた実りのある種を更に広いところへ再び植え付け

る場所です。

そのように、教育の本来の姿は、そうした循環型の中で慈悲心・愛及び縁起に基づく社会理念を世界へと広げるものですが、現代の学校教育制度では、全体的に言うとならぬ品質の良い種を植えていません。当然ながら多くの家庭でも子供の心の中に慈悲心・愛及び縁起を知る智慧の種を植える余裕のある環境に恵まれていません。

従って、縁起の因果応報の視点から言うと、戦争・犯罪・自殺・孤独死・家族関係の崩壊・虐待・過労死・環境汚染などの問題は社会的及び国際的な問題として深刻化してきてもおかしくないと言えます。

#### 4. 現代教育問題をどう克服するか

今の教育制度は時代遅れです。日本の教育制度も例外ではありません。では、どうすれば良いのでしょうか。

仏教徒は、2500年前からすべての人類が知っておくべき透明性のある科学的な人生観及び世界観を明示しました。現代の科学と肩を並べていけるのは唯一、仏教の見解だけです。

仏教徒は、近代の科学より2500年前からすべての現象・物事は縁起（相互依存性）によって存在し、成立していることを知っていました。そして、慈悲・愛も2500年前から個人レベルから国際レベルに至るまでのあらゆる領域における平和と幸福の基礎であることを明確に確認していました。それらの事実は、仏教の経典から読み取れます。

そうした大量に存在する貴重な仏教経典を、チベットとインドの偉大な学者達は、人類の平和と幸福のために命をかけて守り続けて来ました。

12世紀頃、インドが異教徒による破壊を受けている間に、インドとチベットの学者達は、500年間の歳月をかけて300巻以上の経典を正確にチベット語に翻訳しました。それによって仏教を危機から保護することに成功しました。

今度、それは今の中国共産党政権による残酷な破壊を受けました。それにも関わらず、チベット人の仏教徒達は、自分の命よりも仏教の経典の方を最優先し、隠せるものを隠し、運べるものをインドへと運んで学び、保護に成功しました。

日本も、いわゆる大乘仏教が広く伝わっている国として、『般若心経』を多くの人々が唱えています。しかし、今、それをただ唱える時代ではありません。それを中心に、現代文明の上に仏教の経典の中の哲学的及び科学的な部分を徹底的に研究し、慈悲心・愛及び縁起の正しい意味を広い社会へと広げる時代です。それを教育の柱にしない限り、日本の今後の存在感は引き続き薄らぎ、安定の確保も難しくなるでしょう。

#### 註

- 
- i 四諦：①苦諦—苦しみは苦しみであるという真実（例、生老病死の苦）、②集諦—それを起こす原因が必ず存在するという真実（無明は根本的原因となる）、③滅諦—すべて無常・無我であるがゆえに、その原因を消滅し得るという真実（無明は、無我・縁起論を知る智慧の力で破滅し得る）、④道諦—その消滅を可能化していくための手段や方法が必ず存在するという真実（八正道や六波羅蜜行などはその手段及び方法となる）。
  - ii 八正道：①正思惟—怒り・欲望・心を乱すエネルギーが邪思惟。そうした良くないことを考えないようにストッパーをかけること、②正語—嘘や人の悪口・うわさ話・自慢話などを言わない。万一、頭の中でよからぬことを考えても、それを口にしない。③正業—殺生をせず・盗みをせず・不倫をせず・酒に溺れない。これらの原則を守った上で心と言葉を律して正しい行いをする。④正命—生活の糧はちゃんとした手段で得る。他人に害を与えるような仕事や不

正な仕事はしてはならない。⑤正精進—良いことは思ったら即実践、それが実現したら次回からも繰り返す。悪いことは思ったら時点で阻止、悪い行動は繰り返さない、の四つを遵守。⑥正定—ただ歩くことやありふれた会話など、日常の行為に集中する。自分の中の感じる度合いがアップするよう努力する。⑦正念—とりわけ大切なのは、自らの苦しみに気付くこと。よからぬ方に行きそうな心の動きをキャッチして方向転換させる。⑧正見—物事を、好き嫌いを交えずに、ありのままに認識し、苦しみのメカニズムを知り、無常や無我を体得して執着を離れる。月読寺住職・小池龍之介著〈四諦 八正道で人生リセット〉『日経おとなのOFF』（雑誌）September 2010 NO.110 大日本印刷株式会社 35～39頁。

- iii 三門：三門とは身・口・意による振る舞いや行為を意味します。上述の八正道の①（正思惟）は〔意〕に関する動機を、②（正語）は〔口〕に関する言論を、③（正業）は〔身体〕に関する行動の規範を指しています。
- iv 賢者の三業：①説（解説力）—経典や教科書などの内容を正しく、分かりやすく教える能力。②弁（弁証力）—理論的・哲学的な視点から議論し、物事のあり様の真実を示せる能力。③著（著作力）—広い社会に承認し得る作品を作り出せる能力。仏教思想に基づくと、この三業が同時にできないと「賢者」として認められない。これは学校の教育制度にも導入されていますが、それを達成するための手段及び方法には、①聞（聞いて）、②思（良く考えて）、③修（定着させること）の三業が求められます。